

今年度、3年文学国語では教材として、夏目漱石『ころ』を取り上げた。

『ころ』は1914年発表の長編小説である。『彼岸過迄』『行人』『ころ』は、漱石の後期三部作とされている。前期三部作は『三四郎』『それから』『門』、『三四郎』ではかなわなかった恋、『それから』ではかつてのかなわなかった恋の未練を引きずった男が女性を取り返そうとするまで、『門』では取り返した女性との生活と罪の意識、というようにつながりが見られる。後期三部作には、つながりのようなものは見られないものの、人間の心の複雑さ、苦悩、葛藤などが描かれているという共通性がある。国語教材として取り上げられ、以降、70年余に渡って各社の教科書に採録されてきた、いわば定番教材であり、そのため、人口に膾炙した作品となっている。

・作者について

夏目漱石は1867(慶応3)年二月九日(旧暦一月五日)、江戸牛込馬場下横町(現在の新宿区喜久井町)で父夏目小兵衛直克(五十歳)、母千枝(四十二歳)の五男末子に生まれ、金之助と命名される。生後すぐ四谷の古道具屋(あるいは源兵衛村の八百屋)に里子に出され、後に連れ戻される。1868(明治1)年塩原昌之助(二十九歳)の養子となり、内藤新宿北町の塩原家に引き取られた。1870(明治3)年四月、種痘令の布告により種痘を受け、それがもとで疱瘡になり、終生あばたに悩む。

主な作品に、『吾輩は猫である』、『坊ちゃん』、前期三部作『三四郎』『それから』『門』、後期三部作『彼岸過迄』『行人』『ころ』や『明暗』などがある。

・『ころ』について

人間は他者との関係の中に生きる存在である。我々が何かをするのは他者との関係によってであり、「心」はその後を追いかけるしかない。そのようにある遅れの中でしか存在しえない人間という存在の不可思議さを描く。

・授業展開について

今回は「難解語句の意味プリント」を用意し、人物、情景、心情の描写を的確に把握するとともに、この作品が人間の心の複雑さ、不思議さ、捉えがたさに正面から向き合おうとしていることが理解できるように読み込んでいった。

・授業を終えて

「ころ」という小説を「エゴイズム」を中心に論じる一方で作品の構造や他者との関係性を考える多様な読み取りを共有することができた。難解な語句と表現に手を焼いた面もあったが、読み取る・感じ取る・思考する力が以前より身についた生徒も多く、実りある授業となった。